



HACK

3

潜入

KAI SHIGIHARA



3. 潜入

3 潜入

隣国レイノックスには、海がある。

レスリーの母国は、高い山に三方を囲まれている。海外線を持たない。山を越えずに入国出来るのは、ここレイノックスだけ。外国との関係が気薄で、同朋意識が強い、よくいえば一致団結した、悪く言えば閉塞感の強いのが、レスリーの母国だ。

今、レスリーの目の前に広がっている光景、水平線、海岸線、色とりどりのパラソルにいかにもセレブっぽい人々などは、母国では見られないものだった。

軍が用意してくれたのは、プライベートビーチまである、最高級のリゾートホテルだった。実際は任務だが、表向きは恋人同士が休日を楽しむための滞在。軍司令官の息子であるジュリアスは、隣国レイノックスでは顔や名前がチェックされている。有名人というわけではないが、高級リゾートだけに、ジュリアスの顔を知っているレイノックスの中枢人物に遭遇する可能性も捨てきれない。そのため、ジュリアスもレスリーも、本名で入国することになり、必然的に軍司令官の息子が使用するにふさわしいホテルが選択されたということだ。高級ホテルは、プライバシーも配慮されているので、好都合でもあった。

視線を感じて振り返ると、チェックインをすませたジュリアスがこちらに歩いて来ていた。

「お待たせ。行こうか」

「ええ」

ロビーの窓から海を眺めていたレスリーは、ジュリアスの方へと歩き出す。その時、レスリーとジュリアスの間を急ぎ足で通り過ぎようとした男性にぶつかってしまった。

レスリーはバランスを崩し、転びそうになる。それを咄嗟に支えたのは、ジュリアスの腕だった。

「！」

二人が触れ合った途端、びりっと電気が走る。それは覚えのある感覚。初対面のときの、あの握手のあとのびりっと、同じだった。

(触らないように気をつけてたのに)

「転ばせればよかったって？」

(そうは言っていないでしょ)

「大丈夫。落ち着いて」

覗き込んでくるジュリアスの深いグリーンの瞳は、冷静で落ち着いていた。

「大丈夫よ」

レスリーはしゃんと立つと、ジュリアスに微笑んだ。

「じゃあ、行こう」

ジュリアスの隣には、二人の荷物をカートに乗せたポーターもいる。ここはレイノックス。すでに潜入は始まっているのだ。

レスリーは一つゆっくり呼吸すると、冷静さを取り戻し、ジュリアスと並んで歩きだした。

「そういえば、聞いていなかった。君は泳げるの？」

窓の外に視線を向けながら、ジュリアスがリラックスした様子で聞いてきた。

「うーん、まあ、それなりに」

「嘘っばいな」

即座に否定され、思わず嘔き出してしまった。

「どういう意味？」

「ジムで毎日何キロも泳いでいそうだから」

「毎日ってわけじゃないわよ」

ふと、ジュリアスの手がのびてきて、レスリーの手を握る。レスリーはびくりと反応してしまった。

どういうつもりかと、ジュリアスの顔を見上げれば、彼と目と目が合って、それはもう優しく微笑まれてしまった。

彼の笑顔にお目にかかるのは初めてで、それが驚くほど魅力的で、レスリーは自分が赤面してしまうのをとめられなかった。

(こうすると、君と内緒話ができる)

(驚いた)

(予告するべきだった?)

ちらりと横目でにらむと、レスリーには横顔を見せているジュリアスは口の端を上げて見せた。

ロビー棟を出ると、二人はポーターの運転するカートに乗る。そして、点在するコンドミニアムの一つに乗り付けた。

「こちらのお部屋になります」

お部屋というより、独立した小さな小家といえるだろう。玄関を入ると、広いリビングダイニング。正面の壁は大きな吹きだし窓になっていて、ポーターはまずそこを大きく開け放った。するとそこは広いウッドデッキになっていて、そのままビーチへと降りられるようになっている。

レスリーはポーターの相手をジュリアスに任せると、すぐにウッドデッキへと出てみた。

「.....ステキ」

部屋からビーチに出て、そのまま帰ってこられるようになっている。ウッドデッキからの景色も最高で、ここの椅子でシャンパンでも飲みながら海を眺めれば、何時間でもすごせそう。

この辺のビーチは宿泊客専用らしく、人影はほとんどない。お隣のコンドミニアムとも十分な距離があるし、プライバシーは完璧に保たれていた。

「気にいった？」

「ええ、とっても」

ポーターは帰っただけ。リビングからジュリアスが手を差し出している。どうやら、手をつなげということらしい。まだ少し躊躇するところがあったが、レスリーはその手を取る。すると、ジュリアスに優しく手を引かれ、室内へと導かれた。

「部屋の中を見に行こう」

(盗聴器の類をチェックにね)

「いいわね」

(了解。適当にしゃべっておくわね)

広いリビングダイニング、食洗機からオーブンまで完備したキッチン。ベッドルームは二つで、バスルームも二つ。全自動洗濯機のある小さなランドリースペースまであった。そのすべてを、二人でのんびりと見て回る。部屋の感想を言い合いながらも、ジュリアスは全く別のことをしている。盗聴器や盗聴カメラの存在を探っているのだ。

機械と相性のいいジュリアスは、人知れずひっそりと稼働している機械を探し当てるのが得意なのだそう。特に、盗聴器のようにどこかに電波をとばしている機械なら、ほぼ間違いなく発見する。

「疲れてるね」

手を握っていると、そんなこともわかるのだろうか。ジュリアスが不意にそう言った。

「目の下に薄いクマ。手も温かい。眠いからだろ？」

「長いドライブだったからよ」

「飛行機にしておけばよかったかな」

「いいのよ、あなた運転好きでしょ」

「君も好きなのに、運転させなくて悪かった」

適当にあわせつつ、ウィットに富んだ会話を楽しめるのがいい。ちょっぴり毒もあるのが、なおいい。

指摘されたとおり、レスリーは眠気を感じていた。この三日、ジュリアスの能力についての講義と、潜入や諜報活動についてのレクチャーをみっちり受けた。つめこまれた情報量は半端なく、睡眠時間は限界まで少なかった。おまけに、レイノックスまでのドライブは長く、ほぼほぼ初対面のジュリアスと二人きりで緊張もしていた。無事にチェックイン出来て、少しだけ張り詰めた糸がゆるんだのかもしれない。

「少し休む？」

あくびをかみ殺していると、ジュリアスにそう声をかけられた。

「うーん、でもビーチにも行きたいしな」

「ビーチは逃げないさ」

(チェックは完了したの?)

心の中でそう話しかけると、ジュリアスは頷いた。

「問題なし。後は、外からこの部屋を監視しているカメラをチェックする。一人で回ってくるから、休んでいい」といい

「チェックインしてすぐに一人で行動するのは変よ。それに、ここへ来てすぐビーチに行くのはごく当たり前の行動だもの」

このホテルに滞在する人々の行動パターンは頭にたたき込んである。

「ずっと車だったから、歩きたいし」

「……少し歩こうか」

「ええ」

まだ気を緩めるには早すぎる。レスリーはビーチを散歩するのにふさわしく、パンプスをサンダルに履き替えると、笑顔でビーチに出た。

散歩の後、レスリーは少しお昼寝をした。夕食はレストランに予約を入れてあるということなので、またジュリアスの運転で出かけることになった。

それなりのレストランだからと、二人は正装している。高級リゾートにふさわしい装いとして準備した中から、レスリーは白いドレスを選んだ。背中が大胆に露出して、スカートにも深いスリットが入って、足が露わになるが、これぐらいのドレスはここでは普通だ。

運転席のジュリアスは、タクシード。困ったことに、とても素敵だった。絶対に、ジュリアスはヒッピーみたいな格好よりフォーマルが似合う。整って綺麗でノーブルな容姿には、木綿よりも絹だ。

(仕事のパートナーが魅力的すぎるのって、あんまり歓迎できないかも)

「……それは俺も同感だ」

少し躊躇したようだったが、ジュリアスはレスリーの思考が聞こえてきたのを認めてそう言った。

やはり気まずい。レスリーは鼻の上に皺を寄せると、横目でジュリアスを睨む。

「君はとても綺麗だ、レスリー。真っ白な肌に白いドレス。真っ白の中に、君の黒髪と知的な濃いブルーの瞳が映えて、とても美しい」

「……どうしちゃったの？」

「……君の思考だけ聞くのはずるいだろ」

「……」

むすっとした顔になった。そして、耳の端が赤くなっている気がする。どうやら、照れているらしい。

「あの、どうもありがとう」

「こちらこそ、どうも」

「え、えーっと、あの、私、仕事に私情をはさむのはちょっと困るって思うタイプで」

「俺も」

「お、お互い、お互いが魅力的だと思ってるのは、その、嬉しいけれども、でも、間違いはないようにしたいね」

「どちらかが衝動に走りそうになったときは、どちらかが止めるようにしよう」

「しょ、衝動って」

「一応、男なんで」

「あなたのお兄様は、あなたは女性に無害な男だと保証するって言ってたわ」

この任務を引き受ける上で、何度も確認した重要ポイントだ。

「頭の中で拒否している女性を抱こうとしても萎えるな。触れるとどうしても聞こえるから。それを無害というのなら、無害だろう」

「なるほど。無害だわね」

腕力ではかないそうもない。でも、思考力の強さなら、そう簡単には負けない。

「君の心の声は特にパワフルに聞こえるよ。君が望めば、俺の精神を痛めつけるのも造作ないだろう」

慣れてくれば、この思考筒抜け状態も快適になるだろうか。

「そうなってくれると助かる。そこ、本社ビルだ」

唐突な話題転換に驚きつつ、レスリーはジュリアスの視線を追って、右斜め前に見えてきた高いビルを見た。

資料でも写真を見た。今回のターゲットとなる会社の、メインコンピューターがあるビル。ジュリアスはあそこに侵入することになる。

「正直に答えてほしいんだけど」

「ものによるな」

「今回の仕事、あなたにとって難易度はどの程度？」

「.....五段階評価なら、一ぐらい」

「それは勿論、過去に関わった仕事に比べてってことよね」

赤信号で車を止め、ジュリアスはまっすぐにレスリーを見た。

「あまり緊張しすぎなくていい。命の危険がある仕事ってわけじゃない。気を抜けと言っているわけではないが」

「本当に？」

「素人の君に、危険な任務をさせるわけがない」

確かに、ジュリアスは終始落ち着いている。第一印象があれだったから不安もあったが、ジュリアスはここ的高级リゾートに何の違和感もなく溶け込んでいるし、リラックスして楽しんでいるように見える。ピリピリして緊張しているレスリーを気遣ってさえくれている。

「今回の仕事、データを取り返すことは重要だが、それ以上に、俺をどう復帰させようかという軍側のテストみたいなものだ」

「復帰？テスト？」

「そう」

信号が変わり、ジュリアスは車を出す。言葉を選んでいるのか、車が流れに乗るのを待って口を開いた。

「俺の希望と、軍の意向が平行線」

「詳しく聞いてもいいの？」

「……俺は軍に戻らなくてもいいと思っている。軍は以前のように働かせたいと思っている」

「大隊直属だったのよね？」

「そう。だが俺は、一人じゃまともに動けない、半端者の異能力者だ。諜報活動には向いていないと、自分では思っている」

「でも、軍はあなたをとて高く評価しているし、過去の実績だって相当なものなんじゃない？」

ジュリアスがどんな仕事をしていたのか、レスリーは教えてもらえなかった。機密事項なので、当然のことだが。

だが、兄弟とはいえドミニクが自らレスリーにレクチャーをしたり、レスリーが今の仕事を抜けるのにあつという間に巧妙な理由が作成されて周囲が納得していたり、軍にとってジュリアスがどれだけ評価されているのかなんて、教えられなくてもわかるというものだ。

それに、ドミニクから聞いたジュリアスの能力は、破格なものだ。異能力者に慣れているレスリーにとっても、初めて聞くような高レベルの能力者。

「俺の実績を聞いている？」

「いいえ。それは機密でしょ」

「では、なぜ君が今回の任務に選ばれたのかは？」

「……私とあなたは、相性がとてもいいんだと聞いたわ。私には異能力はないけれど、あなたと波長がとても合うので、あなたのアンテナになれるかもって。よく、意味がわからないけれど」

「それがどういうことかも？」

「よくわからない。私の知っている異能力者って、ちょっとしたものを動かしたりとか、触れた物の情報をよみとったりとか、そういったシンプルなものだけだもの。あなたの能力は、複雑で繊細で、それでいて強大だわ。私のわかることって、それぐらい」

「そうか……」

つぶやいて、ジュリアスは口を閉ざした。

どうやら、思考の中に沈み込んだらしい。おかしいことだが、なんとなくそう感じた。自分の方を向いていたジュリアスの思考が閉ざされ、関心がなくなったことを感じる。理屈ではなく、なんだろう、これも彼との相性のよさなのだろうか。

しかし、ジュリアスが軍を抜きたいと思っているとは意外だった。彼の父親は軍司令官であり、兄も最年少の中隊長だ。軍人一家に生まれているジュリアスが、軍を抜きたいと願って受け入れてもらえるのだろうか。

軍はジュリアスを復帰させたいと、今回の任務を命じたわけだ。そして、パートナーにレスリーを指名した。それは、意味あることのはずだ。ジュリアスは自分で、一人では動けないと言った。それは、パートナーと一緒に動けるということだろうか。そのパートナーとして、レスリーが候補にあがっている？ この任務で二人の協力関係がうまくいけば、レスリーをパートナーにジュリアスを復帰させようと軍は考えている？ では、その協力関係とは？ アンテナって？

「追々、説明するよ」

(私の考え、合っている?)

「合っている。君は素晴らしく頭がいいね」

と、ジュリアスはため息をつく。理路整然としていて、とてもわかりやすい思考回路だと、褒め言葉なのだかよくわからないことをつぶやいている。

「では、この任務の主目的は二つあり、一つはデータ奪還、一つは私達の相性を見るためということなのね」

「そう」

「データ奪還自体は、それほど難しい任務ではない」

「そう」

「それで、あなたはこの任務の成功を願っているの？」

ジュリアスは軍に復帰したくないと思っている。

だが、この任務がうまくいけば、復帰という話は本格化するのだろう。復帰しないためには、失敗するほうが都合いいはず。

「願っている。それは百パーセントだ。レイには世話になっているから、恩返ししたい」

「でもそれで、軍に復帰せざるを得なくなったら？」

「俺がしたくないと言え、父は認めてくれる」

「.....なるほど」

司令官が除隊を認めれば、それはもう間違いなく軍をやめることができるだろう。

「君が俺のパートナーになりたくない場合も、ちゃんと元の職場に戻ってもらえる。父には話を通してある。だから、この任務を引き受けたと言っても過言ではない」

「じゃ、何の心配もなく、仕事を成功させればいいのね」

「そう」

ちらりと、ジュリアスはレスリーに視線を向けると、口の端をあげて微笑んだ。とても自然な、魅力的な微笑み。レスリーが彼の笑顔を見るのはまだ数えるほどだが、本来の彼はいつもこうやって笑顔を見せてくれる人なのだと思えた。

どうやら、第一印象のジュリアスはイレギュラーだったのかもしれない。本当の彼は、綺麗でノーブル。フェアではないからと、レスリーに対する賞賛の言葉だって白状し、自分の弱さもさらけ出したジュリアスはきっと、優しく強い人だ。信頼できる人かもしれない。

心のずっと奥深くに、何か温かいものが一滴落ちてきて、小さな波紋が広がっていく。波紋はどんどん広がって、レスリーの胸を内から揺さぶった。